

次の時代の生涯教育

坂 口 順 治
(立教大学)

戦後50年、今年は大きな時代変革の年になった。阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件もあったが、教育界では日教組と文部省とが協力しあうことになった。この事実は、戦後教育の終焉を意味しているし、あらためて、新しい一步を踏み出す年でもある。

50年前、筆者は奈良県の旧制中学で勤労働員に駆りだされ、海軍航空基地で穴掘りの労働をしていた。休憩時には掘り出した唐子遺跡の土器を割って遊んでいた。見かねた歴史の先生は、生徒を集めて考古学の話をした。古代人の生活を尋ねる歴史散歩であった。一方、食事の時間も惜しんで軍国思想を吹き込んだ教師もいた。その人は戦後組合の幹部になって、生徒にストをすすめた。変わり身の速さに人間不信が生じたものだった。戦後は墨で消した新聞紙型の教科書、六三三制、男女共学の強制実施など、占領軍の民主化教育に浸って育った。

こうした人間味豊かな先生や反面教師との出会い、そして教育思想と制度の変革期の体験が、価値混乱の時代を自分で生き抜く力を与えてくれたように思える。生き甲斐を探す学習の時代であった。

戦後の教育は一時期を除いて二つの節目があった。フロムの言葉を借りて言うならばH A V EとB Eの時代である。H A V Eは持つというように、外から内に取り入れ、自分の欠乏充足欲求を満たすという所有価値を優先する時代である。社会は経済価値最優先の拡大生産をとり、欧米に追いつけ追い越せの時代であった。教育は、拡大生産のためのテクノロジーと知識中心であり、立身出世主義の学歴偏重、偏差値教育の時代となった。

時代が経過して、経済と言う物質的欲求がある程度の飽和状態になったとき、人々の欲求は変化して前の時代とは逆に、内から外へ自分を表現するという自己表出欲求の時代へと変化したのである。経済的豊かさが生活の価値を変え、B Eという個人の存在価値を優先する時代になった。経済価値が全ての基準ではなく、個人生活の価値判断を優先する時代になった。それを価値多様化の社会と呼び、

個人の多様な生き方を相互に了解していく必要に迫られた。教育もこうした時代価値の変化に対応して変革していかなければならなかった。しかし、学校教育は社会の多様なニーズに対応していく必要性をもっていながら、不十分なままで教育をすすめてきたのである。いじめや不登校などは、こうした時代のずれを示すような行き詰まった学校教育への回答にも見えた。教材を教えても価値観を示さない偏差値偏重の学校教育であった。

生涯教育学会の発足は、こうした時代の変革期に先立って、同じ志を持つものが変化する現代社会を見据えながら未来社会に向かって、人生の真の価値を実現するための教育を考える同学同労者の相互研鑽の場をもったのである。

そして今、BEからWITHへと時代価値が変化していくであろう時を迎えている。WITHとは共に生きる共生価値の時代を言う。その変化の要因は情報である。経済成長が時代価値を変化させたように、情報は新しい時代の価値形成の要になっている。ニュー・メディアの出現は地球社会の時間と空間の認識を変革させつつあるように、情報のネットワークが発達したことによって、地球規模の交流がたやすく可能になった。どんなに違いがあってもお互いにそれを認めあい、共存していく生き方を求めていく社会価値の時代になって来たのである。つまり「生き甲斐」の違いはあっても相互に認め合って、生涯にわたって追求し、共に生きていく地球ワイドの時代になった。

かつてロバート・ハッチンスが言った「学習社会」がいま現実に地球規模で到来しているのである。いままでの教育は、社会に有用な人材育成という教育投資であった。それから脱皮して、生活そのものが学習であるという生き甲斐を求めて、人間の存在と意味とを探究していく教育になっている。それは自己の能力を自らの力で発揮し生命の躍動を感じる喜びを確かめ合う教育であり、誕生から死にいたるまでの生涯の生活学習である。

情報社会の中で、生き甲斐を求める教育のあり方は、多くの議論を呼びながらも新しい方向を見定めつつある。ヨハン・ヘーリッシュは、人間の存在(Sein)と意味(Sinn)とをひとつに結ぶ考えを展開した。かつてはパンとブドウ酒の聖餐が、神学的な知の枠組みと信仰の実践によって、普遍的な意味が個別な具体において人間生活のあり方を具現化するメディアとしてあり続けたという。つまり、聖餐は存在の意味と意味の存在が立証でき、生き甲斐を見出すメディアであった。生きている意味を体験的に学習したのは、パンとブドウ酒が媒介したのであった。

しかし、聖俗革命によってパラダイムは転換し、機能的に存在の意味を認識するのは、貨幣の価値がクローズ・アップされてからである。物と価値、リアルなものとの抽象的なものとの統合をはかる貨幣は、全てを経済価値に転換し、メディ

アとして人間の生活に欠かせない存在的意味をもったのである。

貨幣が人間の存在と意味との相関関係を機能的に生成させたことによって、人間生活の価値の中心が経済価値になったことが、教育の展開にも大きく影響を与えたのである。教育投資論に見られるように、人的資本を経済成長に寄与する教育が展開されたのである。

さて、次の時代の人間の存在と意味との邂逅を媒介するものは何であろうか。それはためらわずにニュー・メディアであると言えよう。ニュー・メディアは正真性や個性はない。存在は記号化される。仮想的現実性によって存在と意味との相関関係が根本的に問い直されるであろう。しかし、人間の実定性において存在の意味と意味の存在を新たなパラダイムで構築していく媒介となるであろうことは間違いない。

こうした変化の時代に先駆けて、今年の主題は「大学改革と生涯教育」を掲げた。時代精神をリードするのは大学であり、大学の研究と教育活動は社会の予言者として社会的責任を担っている。その大学は旧態依然とした過去に縛られており、その脱皮と21世紀に向けての生涯学習のあり方を指し示していく研究活動がわれわれに課せられている。大学改革と生涯学習の特集は、こうした意味で重要なのである。われわれは今一歩進んで教育の改革へと歩みたいものである。